

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13

30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42

20 21 22 23 24 25 26 27 28 29

10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13

伊地知文庫

文庫20

420





古文書
文庫
せう聖代わゆ程乃るゝあま
書達をめぞんのやまのはくふ久

れけつれあらゆすおひき

ほくまつつきはふるいをさかのち
むおほかつるゝかとやのづれからく
せのつじえをやうふやいとも玉もとみよ

さあははのふえをすねうむ

あやううへとかとほえや衣ぬひあら
あひもよはせや月のゆうふ
つまつをやくあるましの夜うさ
かよきをたけよ松ゆきふを
正すも國ははや一刃あつて山やあ
神の神あさき神の古石いはくとく
はいやすりてあゑまがこつてはは
あやましやあよまといがきん神おこゑ
の御まつひや神おこうやつひくはいや
もまくへまほにまほすまくまく
はくせんかくとひやめくわくあくわく
まくわくはくまくわくれなまくわく
えのほひえあくわきまくわくえ

まきをかづてし櫻ありあは
うめと天の下、おみのじらばく
かむとやまのれひまほ
いぐとふせんかく、
ほくに九あれえおまへ
月それすらまきれ行なき、
山やまのまきれえ
いふれがまくのまくあまく、
まくのまのまくはまく、
まくわくまくわく、
もさくゆくまくまく
おおのれまくまく、
まくわくまくわくまく

源興清

男流の叔

佐渡れり來

宗碩

此度伊勢代園に下りけり
ことハ。いゆる手力往を急げり。是也。
駿州申より宗長禪老ナガシロより文マサニ一
てまう一。行送くれ一ハ。大祚マツヅ主
左頬シラメとして。獨吟ソクイムの句シカヒとひ
やうとけり。志シテも。然タク。老シテ
けりシテかのかにて。沈吟シムイムと
ことゆ記シテ。隨シテ。ニとせ二

とてはひきうね。向ふれまわる。項

朱宮 宗五大草紙下より、伊勢ノ市東山と朱
之木山、八幡ノ社事と申し、慈恵ノ八幡宮と
ナシ。

予一本
元
余宮の序

あ吟よそぞれひよりた
一卒一卒
廿二十

かくはいふ
わざと見ゆる
うそをばらす
うそをばらす

おもむりける一本化
する。指置く

山田 止由氣宮儀式帳に、度會乃山田原云々伊勢名所拾遺下に山田原、度會郡、外宮、祐神社不

ありま、玉葉質、順承のまほ山の原九種の
子がつるぎとこそす代うどあ、
まうじひまうへ退の義みひ、まう
ひも、うちも、づく用よ、俗文よ、私教とも、
あくとも、せいかくも、おきだうこまう
かう、まううふ、まうおれ、まうくら、まう
りえ、まうちえ、まうのぞく、など三代集よ
りえ。たぐひにさむ一本 一ト、
モ」てりのよあくあ、

毛脚 下学集態藝門よ、飛脚急使アマシキ、節用
集比部よ、飛脚云々、運歩色々集比部に、飛脚云々、
吾妻鏡六に、安達新三即為飛脚上洛アマシキ、玉海元曆
二年四月四日条に、光雅仰云、進討大將軍義経去夜
進飛脚アマシキ、云々、太平記十五に、丹波アマシキ、所以
てアマシキのれと、和名抄、工匠具部よ、狀名アマシキ、所以
平底斧アマシキ、也、和名天守アマシキ、乃アマシキ、てをのねアマシキをも
便にアマシキる。

がも。此れもとぞ。いそりまく紙
をどり心地もせど。からうどて
七内廿日ごろにごく思えゆう。
其は尾張の玉ぼるさんくれ上洛
あり。伊勢北邊辺。伊勢北邊辺
ざす。先駆おこしでる。そり

蓮花院 宗長より上に南都にて蓮華院
一にて、またれちもとあるの寺の花のみり、
大衆院 和列舊跡幽考三に、大衆院ハ堀川院
れげ宇、寛治元年二月より造立とく、又云一衆
院云々、大衆院と、かくろくの寺勢職云々^ト
興福寺代寺務職ハ、宝字元年慈訓僧都より

がもれはれきとぞ。へそまくらまく
すどりふせよせど。からうどて
七内廿日ごろにふと思はゆう。
其は尾張のふづうさるくれ上洛
あり。伊勢北國辻通りまでとい
ざまひは。先駆誇ひでけ。そ内
二字一
幸元日ハ良比都。蓮花院とて
知る人れけび修坊に落居まぬ。
又此日ハ大衆院の御門主一本
跡に
奉上ゆき。佛杯一本に

家乾飯志^トと山井の水をひすびほ
かれりひのつとととつるまい
ハ様り身^トは乾飯おくると後^ニ食^ス
ある食と用るてそれもさても名^ハた
にうてそれもひとはる。今^ニ其^ノ事^ア
きあり、

三条がいへ。源氏五^ク、もの才^アと
之^ヲよださねどくいおふんれどもよも
えとほくとわゆふうちつけちや
き、

筒井 大和志三^ム、体下郡筒井、屬邑四云^ムあく
筒井村云^ム

大和志十一^ム、宇陀郡管野、屬邑六^ム、
ま^ク管野後^ニ自^ム白髮峰、管野至^ム何^ム伊^ム

列^ム、

多氣 和名抄^ム、大和守危郡^ムと多氣今^ム
れど、これハ伊勢外^ム、和名抄^ム伊勢多氣
郡多氣多^ム、神名式上^ニ伊勢多氣郡^ム
扇宮式^ム伊勢多氣川云^ム

官領 管領の首字^ム、堪袁抄^ム官領ト申

相可^トア不^ト行^ス。今日^トも又^モ原
御時^ト高^ム御直^ム朝臣久ク此職ニアリシ執事ト
号^スサレバ執事ノ施行トゾ云^ム、昔^ハ高士松ノ
人ミノ役タリキ、近比御一族ノ慾ト成テヨリ
采^ム管領ト申^ム也、庵院殿ノ御代ノ初^ム、斯
波修理大夫高延^ム、靈源院法名道朝始テ此職
ヲ承^リ、檢時再三固辞シ^ムカバ、只天下ヲ管領ト云
御計候ヘト御出サレシカ、領狀被申^テ四男治部
大輔義將^ヲ以テ此職ニ居^ム給^ス云^ム、其ヨリ以降、御
一族ノ職ト成テ、管領ト申^ム也、周東モ管領トイ
共上板久ク此職也云^ム、海人傳^ム、下ト細川武威
守^ム之迄^ハ執事ト称^ス、其以後皆称^ム管領^ム如^此
事^ト、時^ト事^ト、次^ト、
北島のサ持 北島准右親房卿の三男大納言貢能
卿^ト、代^ム伊勢国司^ト、天正^ム、中納言真
教卿、盛田信長の長子信雄を養子^ト、その家
を失^フひひだるとあるハ、具教^ムの父時具朝臣
ナリ^ムや、諸家傳補任^ス矣、

相可 和名抄^ム、伊勢多氣郡相可^ム所布加云^ム、神名
式上^ニ伊勢多氣郡相鹿半^ム山神社、相鹿^ム土神社相

相可^トア不^ト行^ス。今日^トも又^モ原
左傍^ムの尉弘貞、承^ムト。されど此度^ト
びハ此度^ム老人^ム余^ム力^ムためられ
た。高向二頭大夫光定^ム承^ムて。年
比^ムの内侍^ム也。即^ムがて子向^ムの
子向^ム也。光定^ム化貞^ム興行^ム

あ^ムす^ムに^ムす^ムに^ムす^ム。此^ム法樂^ムは^ムる^ム
り^ムて。官領^ムの^ム歎^ム向^ムヤ^ムざ^ムされ
り^ム。一本化^ムひ^ムと^ム小天下安全^ムれ^ムい
り^ム。一本化^ムひ^ムと^ム小天下安全^ムれ^ムい
り^ム。高向二頭大夫光定^ム承^ムて。年
比^ムの内侍^ム也。即^ムがて子向^ムの
子向^ム也。光定^ム化貞^ム興行^ム

小毛と古伊倍、遠江佐野郡、小松と吉萬郡など
と。雅樂大祭に於て保送御事利とす。大丸
殿手比は木曾守木曾の孫子ととてもよど
いべ。その例も、吉昌本と良清をみて、宇佐呂木
とよも、古ヨコ木ととていへるなり。

ふされのこころ 風俗が生え太万多礼方チヤウ
奈川ニ復惠天云、奥優秋色葉和難葉、原良入
風俗の異本、かどに、子の女とこらめよわれば
うハそれよりておる。小を古とも平とをせ
一ふとハ既みへるがとし、冠辞考ふもされ
ハもと階玉貫て、おと掛けて歸るされば、あれ
の階とて、古今子玉のこころや
いづとある。おとがくすりゆきよ小瓶など去
りんと、唐よさくらぬがとおとあるんと
見る。

馬渕のなにがー成俊所ナリ。あと
はとめて舟出とベモリ一かまへ
ハカツリて。傍近をやどりて。村
あひやうにうり出ぬ。送りかく
行る。晴がくらり風うちもて。村
耳をそよおとて。浦波内だ。
ゆく。北邊風。あまく。かく
来ふハたづきとおとね旅人

不知

かく。けれ徒然。おとるすに。見り
くい誘。ちひ。是より二見の浦、
もひつるうとされば行みるに
湯れ立。山れ立。まひ。まよ
まよ。孫小似するねのむかわ
いへ。もくち。諸れ方にうらじ
れて。貝石すと渡れ立。ひろ
け。竹取を待ふ。うるーとゆきまほ
く。ゆく。金葉雜上輔弘
右記。薛倫。官雅亮。紫東抄。薛侯の暇息、
さとす。大陵にさとすよ。やね。さとり。旅宿ハ

名目抄子、等繪野歎、類聚雜要は等繪御厨子、すとそのが等繪のふとくぢやう。

演つと、掠り人より、又掠りおうへる也。
産のぬまとと墨表といひ、演すね——と、僕墨表山
にゆきと、山墨表家よぢゆると、家墨表、居持
行と、アリキワト、などようす、墨表ハ孝德紀五年に、
カドミトヨミテ、今ヒトモサ芭ウマサチトモの恩

すり出で。あれをほくと
うそんはるふ。とがみ力ひそ
あにきんにあひたるには力
と力こせ猿のやどりとぞ
くる。れよぞともへも。弘貞
づれよろす。いつう。その外
おり。そりばくへいじ。れどやうじ
物。さよくひそゆ。まゝ内宮の
長官すりとそ。よ向れわざう
して文あり。又生きばすあり。それ

えのかでとねがう、ひがう文よりあれ、
の端紙もあれ、もべてわくれのふれどへ
る名を次古よりハ花冊す春暦廿二年、みま
くととやどぐのまの日にすのまへ
のくじんとおんとおんとおんとおんとおんと
おげされば、もいのもいのむくとおんとおん
お家のやけうらとおんとおんとおんとおんと
おとと、こくせられば、ほりはなんじくにはあ
らん、おいもくじくにうととととととととと
とあき、太平記三千は、裏表ノ經冊五、足素往
ハ吉惠保妙抄、經冊のす、あ世を教へ今
や、お一尺もせし、只今入る事。此れ岸井為
業自よびく、裏書ハ経冊、市子細公見事
すがて、短冊也とお思はん。ひがう、
くは、一尺一寸幅二寸ちくとあり、南嶺遺稿
牛馬向、周田次革、ちくとの説ハ取るたゞ
宮司類聚大補任太中臣系裔などに貞親の比
祭主速志宮司職とあるに、大中臣牛雄宮
司子任ゼー、各別ひとづぬ。

人乃ひはして、うらうううううううう
に。今一そびとまつまつまつまつまつま
ふう。然、おどおどおどおどおどおど
おわしまと會と興行とべとべと
あれど。とくえをかくまわるんも
非モ。あくれば、おづくとおづくと
おととめで。古のものかととおとと
りひりもくはくはくはくはくはくはくはく
いよくをくるなけれど。わざそぞそ

外宮 伊勢二所太神宮と内宮外宮とまづ
と、神名詔書より上天台御宇祭主公御之時、皇
太神者、奥座、故号、内高度會宮者处座、故号外
宮、出自此時也、とみる。古事記上卷より、天皇御
神、者坐外宮之度相神者也、とある。少く内
宮とス称もとす。又よろそび、西宮記より内宮外
宮とある。すと始もん、三代實錄五年本内宮
とみえへ誤りて、古本に同宮とある。トドケ
新古今神祇後憲法師、神則、玉ノ内宮
とよりるが、あら、あやうれりのるべ、さ
ひづくらハ奉き、風氣神祇、新千
載、神祇、新後拾遺賀、を以て神須山内宮の文
とよりるが、あら、あやうれりのるべ、さ
て外宮豐受皇大神ハ、雄略、セニ年九月、丹佐國ト
佐真井原、ト、伊勢度曾郡山田原、鎮坐、ト、ま
く、吉氣宮儀、張、神皇正統記、セニ社住、オ、セニ
社本縁、ちどり入るる追等、
精撰字鏡、不部、博刺同、即昆、捕也、已除す。
、和名抄、漆、音、部、舞色、立成、云、博音、與、章、同、字
亦化、釋、後、正、見、說文、今、字、無、知、俗、疾、去、害、之、
也。

精撰字鏡、不部、博刺同、即昆、捕也、已除す。
、和名抄、漆、音、部、舞色、立成、云、博音、與、章、同、字
亦化、釋、後、正、見、說文、今、字、無、知、俗、疾、去、害、之、
也。

秀。横地簾代當、一本職。オ、連

類聚名義抄傳下卷不部子傳、赤傳、天子傳、各稱云

声云、同傳中卷左部、舞道博士、名云、宣德國譜

下に、自そにつれて、アラモト、心鏡集水部、博サラタラコモ

トモ、下字集詔賢、信標、極、ニミ義同也、但、日本、字也。

云、福娘集家具部、博、檜、櫟、新娘集太平部、

舞、博同、名云、即用集太部、博、元極同も、東寺所藏覽

正、舞引生帳、様、まき折桂、そく、同又明十七年、引

付、舞水、これハ舞風、舞水、舞訓張多部

舞、博も、頭も、全の義、ちるべーと、福富草子、

太鼓擣の面みえ、優錄、天野枝、兵庫役折桂、

斗柄、ちくの古圖と出せり、

ふるうのカミミと魚と、アラモト、ほ氏、平義

ヒミ、シミ、御流抄、アラモト、トウモロコシ

ヒム、ヒム、ヒム、ヒム、ヒム、ヒム、ヒム、ヒム、

本わらやうにわがえで、四句めやらん。
六句めやらん。そぞ桑川、もう上路のみ
人めりし。その人こそやそれし。
彼句に。

ねハよと燒けみととそのかげ。
こ作りし。面よ名所ハいぐれどまう
じとねがえて。着きぬ。ねひそ
くまづべとじやとれとひそぐ。
且つハ一本、たのとくにひらへりゆ
かつハ元、頼

1. 神乃あみとけいまとにのつた

靈 驗

みよとみげ、神風行妻移四の上、五千鈴
川、御衣瀬川、辛治川、一派ナリ、或書云、辛治川
ト八卒治綱ニアル川ナレ云也、水上公五十鈴川、
源ノ末ハ御衣瀬川也云、伊勢名所拾遺集工
に、辛村河、度會郡、内宮、大主と、尾之上の谷あひよ
り流れりつるを、辛村河と云、燒石の方との流
き御衣瀬川と云といへど、おとむけと云ひに
あり、一派二名なるべし、五十鈴はと、名前林
彦益の名ひして、御衣瀬川と云はば、法度の時、後姫
命のものと云ひて、おとむけと云ひて、名づく、
長秋詠歌、後成々、神、ややみととそほのあ
つみ、おとむけと云ふとたがれ、

て。一本、西も志とんとがちて、一本
入 来
ねむす。又せんくわぬぞーの
うど射どりひく。書かうよやとに
引くと生きぬ。さて、來ゆくるゆで
おぐりれど、五字一本化
二字一本化うち
生のわらへ。老師宗祇は
はとふゆう。そり席ぬとく
玉とおもたらすやうにみがき理志
てひぬるよ。教句オニヨテ出

おとてよ名ふへいぐ。連秋の面へ向ふ。名案
とこくらす。面の。房へ連秋引式連
秋初學秋をもむ。

食籠 下学集器財門より。食籠を。攝壤集家
具部より。食籠を。節用集志部に。食籠を。キロ
ウミ。運歩色葉集志部に。食籠を。

あるとにて。その咱がく。も
うとさうつ。れありて。追まち
行るほど。坂中勢並氏安。足代死
三弘宗。はさうれ方。食籠れ
どり。わたり。びにて。あいまい
とまく。日。一日十六日の秋
後。日くに。まく。行る。づた。七字一本化
五と。え。ぬ一本。障
字と。え。ぬ一本。障
て。ひ。ひ。彼方。に。す。ど。い。つ。今。ハ一
そ。他。舟。生。を。い。よ。め。び。船。き。ぐ

か。と。万葉三。安貞王。つやの。あ。う
白。宿。花。と。が。つ。み。と。味。か。家。墨。表。ほん。同
十五。子。二。首。同。セ。ニ。首。家。墨。表。と。う。を。が
り。

さへねど。よ。れ。た。よ。見。と。見。
あ。り。さ。そ。二。享。一。更。柏。と。そ。行。四。一。
比。禪。師。れ。る。が。こ。れ。も。朋。友。い。て。興。あ
る。家。ば。と。葉。れ。を。や。う。か。わ。ば。と。そ
浦。あ。り。と。事。向。
と。と。と。と。す。ひ。て。サ。言。月。ま。ち
い。ば。る。行。と。え。わ。ひ。う。と。み。じ。
ほ。取。と。共。と。よ。湯。一。本。有。香。
あ。ひ。一。本。有。と。み。み。と。わ。の。乱。雜。

りうへて見まへども待りし。娘も
もや娘あんこにうれしにねく
かの脚すぢうねと母子とも
うゑぐり催のト。娘りね。
力勢をとりあへねまで走りゆ
くに彼伊勢尾張のうみ海
ひーさーモロコシをいひゆ。これ
かのりん急だるも。れ
ひ先よいぞだるも。れ
お、玉元の一本素名とよはり

来名 和名抄伊勢葉名郡、
神名上野、伊勢葉名郡、
來名神社二座云々

ほきぬちのやうりハチ教五郎去
傳耐宗一本化主繁宿ハチり。せ
れ日記ハ三輪ハ晴ハ雨ハ一ハた
ましれハそにハ志ハつけ
けハきハ候ハのハやハまハとハと
とヤ二字一本化ベハん。

松之舎藏本奥書
明暦四年成六月廿一日令書了畢

鹿鳴文庫本奥書
成俊神吉代孫荒木田成秀
奉納佐野文庫蔵主本奥書
法橋宗茂

宗頃法師うそばやわいのとひあふたひ
の日記かとよき父翁の文倉よちをえ
おきくもんをあきわれの書ともおは
きすおりをまかうとさーじゆくも
一ほしてふちゆる物をとれるまことをと
庶流文庫にむゆ神風行囊抄小ひき
ちか丈をとらへあくせきちかふし
をもふ一既去よ父翁の説をかくあてか

清かきくもとうもちと文政七と勝とす
とくのやどひくらと高岡清年とす

余嘗讀王鳴盛所著始存稿。有紀心齋
啼猿集序曰。豪者多畜妾媵。得子
甚易。而偶失之。則以為大戚。寢者得子易
則賤而忽之。豪者多不能為詩。寢者深
哀永歎。多借詩以發之。心齋非寢者
也。得子甚難。而復失之。而悲焉。蓋其哀
楚之意。溢于言外。字句斟育。感動人

心者。非歎。噫人生離別之苦。使人腸斷。
何為貴賤貧富之論。寃之悽愴哀愁
之情。莫如水訣也。余甚傷蕙林涉子。

長于才而短于壽也。蕙林妙齡儻才。
翩翩藝苑。遨遊文場。最好校訂典籍。
雖免園小冊。不輕易放過也。是以擇焉
精語焉詳。若得要領矣。今乃甲申
冬。授剞劂以移正之書。余見其手澤。
悲哀酸鼻。蓋知鳴盛之文。能涉人
情也。噫蕙林既亡。而家嚴儀存。非
復窶者也。其心果何如耶。顧以手
澤之書。壽之梓。固其不朽。蓋
亦其悲哀之所以無終極也。乃題
簷下於卷尾。併言之。

文政甲申 腰月

松鳩饗庭盈撰

高田清年子校本目錄

交替式

多度寺縁起私財帳

信明集

義孝集

仲文集

順集

重之女集

匡衡集

忠盛集

隆季集

長綱百首

正覺國師集

澤庵和尚集

衣川軍歌

塚原卜傳百首

鎌倉少限帳

色紙短冊傳

神祇官圖

元龜年中江戸圖

卷之二

遠嶋御百首

順德院御百首

土御門院御百首

高臺院集

為家廟題百首

瑤樹抄

和琴圖

犬追物圖

關東河渠畜

武藏見治川圖

文政七年甲申十二月

書

京都寺町通松原下ル

大極齋橋安堂寺町

勝村治右衛門

江戸日本橋通壹町目

秋田屋太右衛門

須原屋茂兵衛

大極齋橋安堂寺町

秋田屋太右衛門

須原屋茂兵衛



